

| | |
|------|--|
| 開催地名 | 千葉県松戸市 |
| 開催日時 | 令和8年1月16日(金) 14:00~16:00 |
| 開催場所 | 松戸市民会館 |
| 語り部 | 佐々木 守(岩手県釜石市) |
| 参加者 | 松戸市民約500人 |
| 開催経緯 | この防災講演会は阪神淡路大震災の教訓を受けて、この時期に毎年開いている。近年でも各地で大きな地震や気候変動による豪雨、土砂災害も頻発している。松戸市として、無電柱化の推進やまた避難所運営の強化など様々な災害対策、災害に強いまちづくりを進めている。本日の講演が皆さまにとって実りあるものとなればと思う。 |
| 内容 | <p>大震災における釜石市の教訓から「危機への対応」 — 人的被害ゼロを目指して —</p> <p>(1) はじめに 東日本大震災から間もなく15年が経とうとしている。この間、全国各地から多大な支援を受け、釜石市は何とか復興への道を歩んできた。まずはその感謝を申し上げたい。 震災当時、私は釜石市の防災担当者であった。自治体職員の使命は、住民の生命と財産を守ることである。しかし結果として、多くの命と財産を失わせてしまった。行政マンとして失格であるが、自分と同じ失敗をしてほしくないという思いでお話させていただいている。 釜石市では1,000人以上の方が亡くなった。本当に悔しくて、情けない思いが消えることはない。本日は、自分の失敗と反省を率直に伝え、今後に活かしてもらえたらと思う。</p> <p>(2) 釜石市の概要と津波災害の歴史 釜石市は岩手県沿岸中央部に位置し、三陸リアス式海岸の一角を成す。世界三大漁場の一つに数えられ、近代製鉄発祥の地としても知られる。かつては人口10万人近くを擁したが、製鉄所の合理化とともに人口は減少し、震災前には4万人強、現在は3万人を切っている。 三陸沿岸は津波の常襲地帯であり、明治29年、昭和8年、昭和35年など、繰り返して大津波に襲われてきた地域である。歴史的には津波の恐ろしさを知っていたはずであったが、年月の経過とともにその記憶は風化していた。</p> |

(3) 震災前の取り組み

私が防災担当となったのは震災の2年前である。当時は宮城県沖地震が高い確率で起きると言われ、防災は市の基本計画の柱の一つであった。私は自主防災組織の立ち上げや防災施策を先進的に進めているつもりであった。しかし、それらは現実には全く役に立たなかった。

地域防災計画には、死者への対応、避難所運営、住宅被害への具体策など、肝心なことがほとんど書かれていなかった。各地域に自主防災組織を3年間で20組織ほど作ったが、取り組みの途中で震災が起こったため、本当に役に立ったのか、いまだに答えは出ておらず、悔しい思いである。

(4) 釜石の防災教育「釜石の出来事」

釜石が世界的に注目されたのは、子どもの防災教育である。

いわゆる「釜石の奇跡」と呼ばれたが、地元では1,000人以上亡くなっている中で奇跡とは言えないという声もあり、「釜石の出来事」と改められた。

これは、東京大学の片田敏孝先生を中心に、子どもの防災教育を全国に先駆けて行われたもので、子どもたちは繰り返し訓練を受け、自ら判断して避難する力を身につけた。結果として、学校管理下では一人も亡くならなかった。この成果は確かであり、子どもの意識が変わったことを示している。そして、子どもから家族、そして地域へと意識を広げようとした、その途上で津波は襲来し、多くの大人が亡くなったのである。

(5) 東日本大震災の発生と被害状況

2011年3月11日14時46分、東日本大震災が発生した。私は市議会の議場において、激しい揺れが襲った。直ちに防災体制を立ち上げ、避難指示を出したが、約30分後に巨大津波が襲来した。多くの市職員や議員、住民が市役所に集まり、全員を屋上へ避難させた。屋上に上がった時、釜石の市街地は一面水に覆われ、街全体が湖のようになっており、頭が真っ白になったことを今でも覚えている。

この震災により、釜石市では死者888人、行方不明者152人を出した。岩手県全体では現在も1,000人以上が行方不明であり、大槌町でも400人以上が見つかっていない。警察や海上保安部による捜索は今も続いており、14年を経た現在も、山田町の子どもたちの遺骨が遠く気仙沼市で見つかるなど、被害は終わっていない。避難者は人口の約4分の1にあたる1万人に及んだ。釜石は山が多く、製鉄所を中心に住宅が密集しているが、これらの地域も津波で流失した。リアス式海岸沿いの漁業集落はほぼ壊滅し、学校や産業、養殖漁業や漁船もすべて失われた。

消防署、警察、海上保安部といった防災関係機関も流失し、災害対応は機能不全に陥った。電気・ガス・下水道などのライフラインはすべて途絶え、生活基盤は

崩壊した。私が家族と連絡を取れたのは約1週間後であり、その時にようやく互いの生存を確認できた。

釜石市は6つの湾を有するリアス式海岸であり、津波は観測当初の20メートルを超え、実際には25～30メートルに達した。大槌湾沿いの鵜住居地区では約6割が流失し、防災教育に力を入れていたにもかかわらず甚大な被害を受けた。

(6) 災害関連死の課題

震災後に増加した災害関連死は大きな課題である。避難所環境、特にトイレや寒暖対策、医療・精神的ケアは重要である。

(7) これからの防災に必要なこと

災害では「自分は大丈夫」という正常性バイアスが働く。これを前提に対策を考えなければならない。都市型災害に関しては、帰宅困難者は「生きている人」であり、無理に移動せず留まる判断も重要である。優先すべきは帰宅対策よりも、耐震化や火災防止などの街づくりである。

防災文化を根付かせるためには、子どもを中心に据えた取り組みが有効である。子どもが学び、親や高齢者を動かし、地域全体に文化として根付く。子どもの頃に身につけた判断力は一生残るものである。

経験だけでなく歴史から学び、伝え続ける文化をつくらなければ、同じ被害は繰り返される。さまざまな時間帯や状況を想定した訓練を行い、自助・共助・広域連携を前提とした備えと判断力を持つことが不可欠である。

(8) さいごに

いつも行政の方に言っているのは、“記録が大事”だという事。映像や音声など様々な形で記録を残し、次に活かしてほしい。とにかく災害で人を死なせないという事に尽きるのである。



| | |
|-------|--|
| 開催地より | <p>自主防災組織や避難所運営の実情、また、津波から命を守る行動は参加者の防災意識を向上させ、命を守る行動について深く認識することができました。</p> <p>さらに、発災直後の行政の動きや、市民にとっては「いざという時に自分たちが何をすべきか」を考える大きな気づきとなりました。</p> |
|-------|--|